

伝統芸能による表現活動を通じた総合的な学びの研究

最終更新日：2016年5月16日

— 狂言を柱とした音楽・舞踊・言語表現力育成カリキュラムの構築 —

【プロジェクト代表者】
音楽教育講座
准教授
山本 百合子

キーワード

音楽科・表現・総合芸術・伝統芸能・狂言

プロジェクトの内容 (目的・方法・結果と意義)

本プロジェクトは、伝統芸能の代表例として早くから小学校の国語科教材として採用され、また近年は中学高等学校の音楽科教材としても注目されている狂言の多角的な学び方について、現状の学校現場における実践状況の取材や調査および新たな授業実践の試みを通じて、音声／身体／言語の表現力を同時に高めていくような「表現」の総合的な学びのカリキュラムの構築を旨とすることを目的としている。

研究は、福岡市・宗像市・福津市の小学校計6校の協力や在福の和泉流狂言の役者の協力も得て、以下の作業によって進められた。

- ① 小学校教育にける狂言教材の位置付けと伝統芸能教材全般の教育上の目標・目的の調査および確認(教科と内容の両面から)
- ② 小学校現場における狂言教材の実践状況と、教員の伝統芸能教材への意識調査
- ③ 狂言の伝統的な伝承形態と、学校教育の教育形態の、両者の調査および比較検討
- ④ 小学校における狂言教材の総合実践的カリキュラムの試案作成と授業実践、その教育効果や成果および課題の検討

本研究により、学校教育の教科の枠組みの中で、その本来の魅力や教育効果が十分に引き出されていない日本の伝統芸能について、教育現場への教材化の指針を示したい。

成果の応用可能性 (私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。)

日本の伝統音楽や伝統芸能が『学習指導要領』の中で重視すべき教材としてうたわれるようになり教科書にも紙幅を割いて多くの情報が掲載されるようになった昨今だが、学校教育の現場では、従来の教科の枠組みの中で現職教員達はその教材扱いについて模索しているのが現状であり、その背景には、日本の伝統音楽や伝統芸能が現状で教材化されている国語科・社会科・音楽科といった教科の教員にとって本来の教科の内容や目標の範囲を超える内容を持ち、従来の教科の枠の中で免許を取得してきている現職教員の知識や経験の範囲では授業構築が難しいという側面がある。

本研究を通じて、学校現場の現状の教育環境や教員の資質能力の現状をふまえつつ、今後の学校教育に求められていく新しい教育内容や目標に対応するための様々な具体的方策を提案し、同時に、これまでの学校教育の教科の枠組みに入りきらずにいた表現の総合性や表現の多様性といった視点による教育内容を実現するための具体案を示していきたい。

その結果として、学校教育がより現実社会の多様性に即した幅広く豊かなものになることを目指している。

このプロジェクトの形成に寄与した制度等

平成26年度 全学経費による大学の共同研究部会と附属幼稚園による共同研究プロジェクト
平成27年度 学長裁量経費研究推進支援プロジェクト

プロジェクト構成員 (所属・職名・氏名・役割分担)

研究代表者: 音楽教育講座 准教授 山本 百合子
研究協力者: 和泉流狂言 野村 万禄・宮永 優子
福岡市立平尾小学校
福岡市立西高宮小学校
福岡市立春住小学校
宗像市立赤間小学校
福津市立福間西小学校
本学附属附属福岡小学校・附属幼稚園